

新出資料による禅僧の「遺偈」の研究（下）

—『禅林雅頌集』所収—

田 島 柏 堂

(六) 殺レ仏害レ祖、寸陰不レ閑、及ニ一息断^{●ズルニ}、直断^ニ無間[○]、嘆須弥走入^ヲ蘿絲^一 珪林開山

「珪林開山」とは、『続扶桑禪林僧宝伝』卷三によれば、「珪林竺山仙禪師伝」と見え、「竺山禪師、生江州清滄平氏、名得仙、(中略)応永元年、寓野之宇都宮造珪林精舍(中略)晚帰^{スルヨコ}珪林二十年」と記しているから、下野の珪林寺(栃木県宇都宮市清住所在、現在は桂林寺と書す)を開創した竺山得仙(三四四一一四一三)のことである。竺山は、康永三年(南朝、興國五年)に生まれ、十九歳のとき出家して京都に至り、大辯了訥、或は寂室元光(近江永源寺)・平心処斎(尾張定光寺)・大拙祖能(上総吉祥寺)などの臨済五山派の人々に参じ、のち美濃妙應寺大徹宗令に謁して奉侍すること六年、ついにその法を嗣い新出資料による禅僧の「遺偈」の研究(下)(田島)

だ。康暦二年(南朝、天授六年・一三八〇)摂津に護国寺を開き、本師大徹を請して開山祖となし、自らは第二世となり、足利義満などの帰依をうけた。また下野に珪林寺、近江に長命寺を開創し、ついで越中立川寺大徹の遺命により、その席を董し、応永五年總持寺(十四世)、のち永光寺・妙應寺に歴住し、再び珪林寺に住して同二十年三月十九日、七十歳で入滅されている。この偈はその時のものである。

『日域洞上諸祖伝』卷下・『日本洞上聯燈錄』卷三・『延寶伝燈錄』卷七には、「殺レ仏殺レ祖、寸陰不レ閑、及ニ一息断^{●ズルニ}、直断^ニ無間[○]、過了也、嘆須弥走入^ヲ蘿絲^一」と、竺山の遺偈を載せていく。そこで本集の文句と右の史伝書掲載の文句と比較するに、本集の起句の三字目「害」は「害」

の省字であるが、史伝書には「殺」とある。また本集の転句「及一息断」の右よりの下に、。。印を付し、上欄には「直断」とあって、。。のところへ二字挿入することを指示している（前号巻頭写真および本文四頁参照）。つまり結句「無間」の上に「直断」と挿入するから「直断無間」の四字句となる。ところが、右の二字目「断」の字は、史伝書では「墮」を作り、四字目「間」は「閑」を作り、「間」は「閑」の俗字である。また本集では結句の次に「嘆」とあるが、史伝書には「過了也」の三字があつて、その次に「嘆」とある。本集の結句の二字目「弥」は、史伝書には「彌」と作り、云うまでもなく「彌」は「彌」の省字である。以上が本集と史伝書との異にしているところである。

なお起句の「殺・仏書・祖」は、「殺」・「害」は、偏執（妄念）を殺害する意。「仏」・「祖」を修行上の指標として意識しながら、しかもそれに悪くとらわれないことをいう。とらわれれば、生仏・迷悟などの対立的偏見におちいれる。結句の「無間」は無間地獄の略。無間地獄は、八熱地獄の第八、極苦の地獄で七種の鉄城があつて、銅が沸いて罪人を焚き殺す、五逆罪のほかに、大乗を誹謗し、空しく信施を食する者が墮ちるという。一転語の「須弥」は、須

蓮からひきだす糸のことと、蓮華藏世界すなわち極樂世界を指している。因みに『続扶桑禪林僧宝伝』卷三、『本朝高僧伝』卷三十八の竺山の伝には、遺偈を記載していない。

（七）一精明分、五十一年、功位共転、坂未分前
無漏和尚

「無漏和尚」というのは、無漏素崇（？—一三五〇）のことである。『大乘聯芳志』の「三代明峰素哲和尚」の伝に、法嗣二十六員のうちに「無漏素崇」の名が見えており、また同書「前住無漏素崇和尚」の伝には、「嗣₄₄法明峰哲₄₅、明峰寂後、衆請住₄₆本山」、出明峰喪記」と記しているから、無漏は、明峰素哲（十）の遺偈の項参照）の法嗣で、明峰の示寂（觀應元年、南朝正平五年（一三五〇）三月二十八日）後、大衆に推されて加賀大乘寺の住持を董し（世代に加えず前住とす）、本師明峰の葬儀を厳修したことが知られ、明峰下の主要門人であつたことが推考される。なお右の文中に「明峰喪記」とあるのは、詳しくは「大乘₄₇三代明峰禪師送亡略記」と称し、大乘寺に叢蔵されている。『曹洞宗大系譜』・『加賀大乘寺史』によれば、無漏は加賀永福寺（石川県能美郡土室、廢寺）開山となり、嗣法の弟子に

は悟山祖了（同寺二世）、玉林道金（同三世）、中石至玉

（大乘寺）、日峰があつたことが知られ得る。⁴⁶⁾

また永光寺

所蔵の応永五年（一三九八）八月十五日付、「永光寺領若

部修理田定書案」なる文書には、明峰下十二門派尊宿の

連署が見え、その筆頭に「無漏和尚門派發願主至玉 在判」

と、中石至玉の署名が存するが、これにより無漏は同派中

の主流を占めていたことが首肯される。その他の文書或は

各史伝等を探索するも、無漏については所見がないので、こ

れ以上に詳しく述べることが出来ないのは甚だ遺憾である。

従つて生誕・入寂紀年についても不詳。右の偈によつて五
十一歳で入寂されていることがわかる。この遺偈は、どこ
からここに収録したものか、全く不明である。いずれにし
ても、本集のみに記載されている貴重な遺偈である。この
点、本集の資料的価値の高いことが肯かれる。

なお起句の「一精」は、心がこまやかに一すじであるこ
と。転句の「功位」は、功勲五位のこと、中国曹洞宗の
洞山良价が初めて唱えた教説の一つである。つまり修行者
の進歩の段階を五段（向・奉^ぶ・功^ご・共功^{ごう}・功功^{こうこう}）に分けて
説いたものである。洞山良价が首唱して以来、多くの師家
が修行者を導くための一手段としている。

新出資料による禅僧の「遺偈」の研究（下）（田島）

（八）幻去幻來。七十二年、断岸透路、白日青天。

月鑑和尚

「月鑑和尚」とは、月鑑虚淳（きよたい）のことであつて、
月鑑は、『大乘聯芳志』の「三代明峰素哲和尚」の伝に、
法嗣二十六員のうちに、その名が見えておる。また『日本
洞上聯燈錄』卷二・『曹洞宗大系譜』によれば、月鑑は能
登永光寺（石川県羽咋市酒井町所在）の瑩山禪師に参じ、
のち明峰素哲について嗣法し、總持寺に輪住し、また能登
圓興寺の開山となつた。遺偈により七十二歳で示寂された
ことが推考される。生寂年とも不詳。嗣法の弟子は一人で
慧欽という人物のあつたことを記しておる。月鑑の伝記に
ついては他に見出されない。従つて、月鑑の遺偈も、無漏師
と同様に本集によつてのみ知られるのである。なお転句の
「断岸」は「がけ」・「絶壁」のことで、つまり「陸のは
て」の義から転じて「極所」・「どんづまり」のことをい
う。結句の「白日青天」は、一点妄想の雲なき意である。

（九）全生全死、元是一般、這裏着眼、一重無関。

松岸禾上

起句の「全生全死」は、前掲の「とく、下二字の「全
死」はもと「全生」とあって、「生」の字の右側に。印を付

して「死」と訂正しているから(前号の巻頭写真および四頁参照)、いに「全生全死」と改めておく。「松岸⁵⁰禾上」の「松岸」とは、松岸⁵¹旨淵(?-1363)のことである。「禾上」の「禾」は「和」の省字であるから、「禾上」は「和尚」のことである。松岸は、『大乘聯芳志』の「三代明峰素哲和尚」の伝に、法嗣二十六員のうちにその名が記されており、また同書「前住松岸旨淵和尚」の伝には、「加州人、嗣⁵²法明峰哲⁵³、始董⁵⁴永天及光禪⁵⁵、尋住⁵⁶本山⁵⁷、後開⁵⁸山能之光恩⁵⁹、無⁶⁰幾又遷⁶¹永光⁶²」云々とあるから、松岸は、前の無漏素崇・月鑑虛淳と同様に明峰素哲の法嗣であつて、播磨永天寺を開き、越中光禪寺(二世)に董住し、ついで大乗寺に住し、のち能登光恩寺の開山祖となり、永光寺にも住して、貞治二年(南朝、正平十八年)六月五日示寂された。これはそのとき書き残された偈である。嗣法の弟子に、照華智鑑・潔華慧了・普悟興龍・通海龍泉・藥室至仙・德翁正呈など十一員ある。前掲の「永光寺領若部修理田定書案」の、明峰下十二門派尊宿連署の中に「松岸和尚門派 龍泉⁶³在判」と通海龍泉の署名が見える。松岸は、明峰下十二門派の一人に数えられ、有力な門人であつたことが知られる。なお『大乘聯芳志』・『重

続日域洞上諸祖伝』卷一・『日本洞上聯燈錄』卷二の松岸の伝には、いずれも遺偈を記載していない。この偈もやはり本集のみに収載されている全く珍しいものである。

因みに四句のうち、承句の「一般」は、「一樣・一齊・同時」とか「平等」の意であり、転句の「這裏」は、「ここ・このうち・このところ・この場合」など、すべて身に近い場所または事のあるその場合を指示する代名詞である。

(十) 普天匝地、八達疎通、七穿八穴、智不到⁶⁴中
哲禾上

「哲禾上」とは、「明峰素哲和尚」のことで、明峰(一
二七七-一三五〇)は建治三年加賀富樫家に生まれ、十七
歳の春、比叡山に登り天台の教えを学び、のち加賀大乗寺
の瑩山禪師に謁し、隨侍すること八年、辭して東西に遊化
し、元亨三年(一三一三)能登永光寺の瑩山禪師のもとに
帰省し、ついにその法を嗣いだ。また永光寺(第一世)・
大乘寺(第三世)の住持を董し、のち越中光禪寺を開き、
『仮名法語』の著を残して、觀応元年(南朝、正平五年)
三月二十八日、七十四歳で入寂された。右はその時の遺偈
である。嗣法の弟子には、前述の無漏素崇・松岸旨淵・月
鑑虛淳の他に、珠岩道珍・大智など三十余人の俊英を出し、

その法流を明峰派と称し、同門の峨山派と相対して、曹洞宗の二大門流となり、宗門の発展に寄与した。明峰の綿密の行持、卓越せる識見は、曹洞宗大成の上に、峨山詔碩と相並んで、瑩山禪師門下の双璧と仰がれ、「法は明峰、伽藍は峨山」という言葉が伝えられている。

『大乘聯芳志』・『洞谷五祖行実』・『日域洞上諸祖伝』卷上・『日本洞上聯燈錄』卷一・『木朝高僧伝』卷二十九・『延宝伝燈錄』卷七・『続扶桑禪林僧寶伝』卷二の明峰の伝や、吉住浩巖氏の著わした『伝記』には、いずれも遺偈を収録していない。⁽⁵⁴⁾ 明峰師の遺偈は、現在、ただ大乗寺に襲載している『明峰喪記』すなわち『大乘三代明峰禪師送亡略記』によつてのみ知られるから、本集所載の遺偈は、⁽⁵⁵⁾ 実に『明峰喪記』に次ぐ古いものと云うことができる。

起句の「普天匝地」は、天に普ねく、地をめぐるにて、天地に充满するの意。承句の「八達疎通」は、道路が八方へ通じていて、さわりなく通ることで、つまり法において無礙自在を得るの意である。転句の「七穿八穴」とは、四方八方に穴を穿つことで、七通八達、無礙自在の意である。「智不到」中は、智的理解をこえた、至極至妙な仏法究尽のところを表わした語である。

新出資料による禪僧の「遺偈」の研究（下）（田島）

（十一）性命尽處、已一息中、清風匝地、八面玲瓈

了堂禾上

「了堂禾上」は、「了堂真覺和尚」のことである。了堂（一三三〇—一三九九）は、元徳二年に生まれ、十七歳にして出家得度し、のち孤峰覺明（出雲雲樹寺開山、諡号は三光国師・法燈派）の弟子となり、東海・北陸を歷遊し、覺明の寂後、峨山詔碩に師事し、さらに近江報恩寺の太源宗真（峨山詔碩の法嗣）に参じ、のちその法嗣となつた。かつて南遊の志あり、応安六年（南朝、文中二年・一三七三）十月、摂津より舟を発し、颶風に遭つて薩摩の羽島に漂著し、ここに庵居した。同国の金鐘寺の開山祖となり、さらに大和の補巖寺（奈良県磯城郡田原本町味間所在）を開創し、また加賀瑞川寺の開山に請せられた。旧仏教の間に介在して、大和国内に曹洞宗の寺院が進出したのは、補巖寺が最初であつて、了堂は近畿地方南部に、初めて曹洞五位の玄風を挙揚した。応永六年七月一日七十歳にて示寂されている。⁽⁵⁶⁾ 右の遺偈はこの時のものであつて、同文の偈が『日本洞上聯燈錄』卷三に収録してある。了堂の遺偈を収録する書としては、本集が最初であるが、本集は了堂の入寂に近接した古写本（入寂より約五十年後の書写）である。

嗣法の弟子は一人で、すなわち太容梵清・竹窓智嚴のすぐれた人材があった。なお『日域洞上諸祖伝』卷上・『延宝伝燈錄』卷七の了堂の伝には、遺偈を記していない。

次に起句の「性命」は、いのち・生命のことである。結句の「八面玲瓈」は、八面は、八方の意「玲瓈」は、玉が透きとおって明らかのこと。つまりどの方面から見ても、心中に少しのくもりもなく、わだかまりのない悟りの境地をいう。

(十二) 金鳥東昇、玉兔西移、生也死也、金機現前。

竹窓木上

「竹窓木上」とは、「竹窓智嚴和尚」のことである。竹窓（？—一四二三）は、生年不詳、初め太源宗真に謁して出家得度し、その後、諸方の禪匠に歴参したが、たまたま大和補嚴寺の了堂真覺に参禅して大悟し、その法を嗣ぎ、ついに師席を董した。總持寺所蔵の『住山記』によれば、応永十六年（一四〇九）十一月一日、同寺に輪住（第二十ニ世）し、同十八年四月二十八日に退住している。またそれ以前、応永二年（一三九五）には、加賀に瑞川寺を開創し、了堂を迎えて開祖となし、自らは第二祖となり、応永三十年八月九日入寂している。これはその遺偈である。新

資料『補嚴禪寺開山支派』（享保年間、鉄門編、同寺所蔵）によれば、通峰真宗、大仲奇与など十五人の法嗣の名が記されており、同寺の後席には、竹窓の法弟に当る了然祖了（第三世）が住している。

因みに、かの幽玄の美をもつ「能楽」を大成し、日本人の芸術意識の究極を究めた天才的人物として世に知られている世阿弥が、曹洞禪に帰投して、補嚴寺の住持竹窓について参禅し、ついに得度してその弟子となり、至翁^{シウモン}善芳と称した。また『補嚴寺納帳』（同寺所蔵）によれば、「至翁禪門・寿椿禪尼」の名が見え、夫妻ともに同寺に田地を寄進している。竹窓の教導による影響は、世阿弥の伝書に禅語が多いばかりか、彼の能樂論の中核をなす厳しい自己鍛錬の精神となって顯われている。なお竹窓と世阿弥、或は『山雲海月』（峨山韶碩の著）との関係については、拙稿「山雲海月と世阿弥」（駒沢大学『宗学研究』第十号）・「峨山韶碩禪師の遺著とその真偽」（下）（愛知学院大学論叢『一般教育研究』第十七卷第二号）に詳しく述べておいたので参照されたい。

竹窓の遺偈は、『日本洞上聯燈錄』卷四に記されているが、本集の同師の遺偈と比較すると、次のような異同があ

る。すなわち本集の起句には「金鳥東昇」とあるが、『聯燈錄』には「金鳥東出」と一字異なり、また承句の「玉兔西移」とあるのは「玉兔西走」とやはり一字異にし、転句は両書とも「生也死也」とあって同文である。次の結句「全機現前」は『聯燈錄』には「全機現時」と記し一字異にしている。両書の文句を対比するに、漢詩学上からも、また書誌学上から云つても、本集所載の遺偈の方が正しいようと思われる。

『重統日域洞上諸祖伝』卷二・『延宝伝燈錄』卷八には、ともに竹窓の伝記を載せているが、遺偈は記していない。⁽⁶⁾ 起句の「金鳥」は、(太陽の中に三足の鳥がいるという想像による) 太陽の異称。「玉兔」は、(月中に兎がすむという伝説から) 月の異称。結句の「全機現前」は、ものの全体のはたらきが現前することである。

以上、永平道元・孤雲懷舜・徹通義介・峨山韶碩・大徹宗令・竺山得仙・無漏素崇・月鑑虛淳・松岸眞淵・明峰素哲・了堂真覚・竹窓智嚴、十二師の十二首の遺偈は、いずれも曹洞宗門の禅匠によって作られたものである。

(十三) 利生方便、七十九年、欲知端的、仏祖不伝

東福開山

新田資料による禅僧の「遺偈」の研究(下)(田島)

「東福開山」とは、臨濟宗東福寺(京都市東山区本町所在、東福寺派大本山)の開山、圓爾辨圓(一一〇二—一二八〇・圓爾というのは、もと道号であつたものを諱としたものである。また辨は辯とも書く)のことである。圓爾は、駿河(静岡県)の人で、奈良・京都で各宗宗義や儒教を修め、また鎌倉壽福寺で退耕行勇に参禪した。嘉禎元年(一二三五)入宋し、徑山の無準師範に師事すること六年、心印を受けて帰朝した。九州の諸寺で說法し、道俗の帰依者が多く、招かれて京都に出て宮中・公卿の間に禪要を説いた。藤原道家建立の東福寺に開山祖となり、禪風の宣揚に尽力した。鎌倉壽福寺に一切經を閲藏し、さらに京都建仁寺(十世)に住して、弘安三年十月十七日、七十九歳で入寂したが、その末期の一旬である。ついで応長元年(一二一)十一月、聖一国師と勅諡された。(国師号の最初)

普通、この諡号の聖一国師をもつて世に知られている。法嗣には、東山湛照(東福寺一世、万壽寺開山)・無闇普門(東福寺三世、南禪寺開山)・白雲慧曉(東福寺四世)・無住一円(字は道鏡、尾張長母寺開山)らがあり、圓爾の法流を東福寺派(または聖一派ともいう)と称し、日本禪宗二十四流の一である。著に『三教要略』・『三教典籍目

新田資料による禪僧の「遺偈」の研究(下) (田島)
「(63)」・「仮名法語」などがある。

・五センチ・重要文化財、前号巻頭写真参照)は、現在東福寺に収蔵されている。これには遺偈の末尾に「弘安三年十月十七日、東福老珍重」と二行に書しているが、入滅する直前、末期の一匁とその年月日と署名を手書していることは、全く驚嘆すべきことである。死に直面しても一糸乱れず、その筆蹟も実に凜々たる気魄が行間にみちみちてい、しかも、余裕綽綽たる禪匠としての境涯が窺い知られる。なおこの種の墨蹟としては最古のものである。この遺偈は、『元亨釈書』卷七・『延宝伝燈錄』卷二・『扶桑禪林僧宝伝』卷一・『本朝高僧伝』卷二十の圓爾の伝記には、いずれも同文のものが記載してある。また圓爾の弟子無住一円の著わした『沙石集』(弘安二年〔一二七九〕から数年で脱稿、つまり十三世紀後半の成立)にこの遺偈が見えているが、圓爾示寂に最も近接しているから、恐らくこれが最古の記録であろう。次いでごく最近公表された神宮文庫所蔵の『金撰集』(『沙石集』を改修編纂したと認められる仏教説話集である。編者は恐らく臨濟宗の僧で、その成立は十四世紀後半と推定される)にも収録されている。されば『禪林雅頌

集』は室町中期、十五世紀の中葉に成立したと推考される
から、この『雅頌集』所載の遺偈は、『金撰集』について
古い記録であることが首肯される。

起句の「利生方便」の「利生」は、衆生を利益するの意で、すべての人々を救うこと。結句の「仏祖」とは云うまでもなく「仏と祖師」のことで、この場合の祖師は、禪門における一宗一派の祖のことである。

古田紹欽博士は、この遺偈について次のように解説され
ている。

利生は利益衆生であり、禅をもつて社会教化の活動をしたことであり、方便はその教化に効果的な方法をもつてしたことである。七十九年の生涯は、専らそのためであったことである。この人によつて禅宗は繁昌を見や、というのである。……この人によつて禅宗は繁昌を見たのであり、その生涯の教化活動は、おそらく悔いないものであつたに違ひなく、その為すべきことを為し終われりとした安心感が、「端的を知らんと欲せば、仏祖不伝」の一語に知られる。(88)

(十四) さかさまニ 倒騎アカク木馬ムハ、踏破虛空スコラ、欲誤セバフシタ蹤跡ル、
結網繁風ツカク

空谷禾上

「空谷禾上」とは、「空谷明応和尚」のことで、別に若虚と号した。空谷(一一三一八一一四〇七)は、臨濟宗仏光派(仏光国師無学祖元の派)の人で、いわゆる円覚寺派系統の禪匠である。空谷は嘉暦三年に生まれ、初め夢窓疎石に従い、後にその上足の無極至玄の法を嗣いだ。夢窓は、同派の将来を考え、その才幹をかつて無極至玄の弟子につけ、「孫太郎」とよんで特に目をかけたほどである。無極の寂後、碧潭周皎・默菴周諭ら夢窓の直弟に参じ、さらに中巖田月に学び、道学兼備の人として当代に重きをなし、絶海中津とともに叢林の「甘露門」と称された。永和元年(一一三七五)、美濃の天福寺に住し、のち同國天寧寺に移り、足利義満の信任あつく、山城伏見の大光明寺、或は等持寺・相国寺・天龍寺等に歴住し、再度僧録をつとめ、生存中すなわち明徳三年(一一三九二)に仏日常光国師の号を特贈された。応永十四年正月十六日八十歳にて寂している。そのとき書き残された遺偈である。著書に『語録』、文集に『若虚集』がある。空谷の門下から純文芸に精神と感性の自由の芸術的欲求の満足を見出した疎仲道芳・天草澄或。

新出資料による禪僧の「遺偈」の研究(下)(田島)

や、海門承朝をはじめ仙岩澄安・東岳澄昕などを出し、曇仲下からは横川景三が出ている。^⑩

空谷の右に掲げた遺偈は、転句「欲誤蹤跡」の「跡」字の右よりの下に、印を付し、また結句の「網結」の中間右よりの箇所には、印を付し、「網結」の「結」の字は、転句の「跡」字の下に挿入することを指示しているから(前号の卷頭写真および本文四頁参照)、ここでは「結網繁風」と訂正しておいた。

『仏日常光国師行実』(『続群書類従』所収)に、同師の遺偈を載せているが、それには本集の起句「倒騎」は「騎倒」に作り、承句の「踏」字は「踏」に作り、また転句の「欲誤」の二字は「要覓」に、結句の三字目「繁」は「係」に作り、それぞれ異にしておる。^⑪『特賜仏日常光国師空谷和尚行実』(『大正新修大藏經』所収)は、本集の「欲誤」の二字を「要覓」に、「繁」は「係」を作る。『本朝僧宝伝』(『大日本佛教全書』所収)は、上の『大正新修大藏經』所収の本と同文であるが、「踏」を「踏」、「覓」を「覓」の字にしているところが異なっている。また『碧山日録』卷四是、本集の転句「欲誤」の二字を、前の『行実』と同様に「要覓」に、結句の三字目「繁」は「係」に

作るが、他の起・承の二句は、本集と同文同字である。この他、『延宝伝燈錄』卷二十六・『本朝高僧伝』卷三十七も、本集の転句「欲誤」の「字を、先の『行実』・『日錄』と同じように「要覓」に作る。ただし「覓」の字は「覓」を作る。これは前に述べたように、「覓」は正字、「覓」は俗字である。⁽⁷²⁾また次の「蹤跡」の「蹤」は、「縹」の字に作る点を異にしている。以上は、本集所載の遺偈の文句を他の各本と対比し、その相違点を述べたのであるが、それではそのいずれが正しいのであらうか。

これについてまず遺偈記載の『行実』・『碧山日錄』の両書を考証するに、前者は空谷の法嗣である天章澄或が、

本師示寂後、七周忌すなわち応永二十年（一四二三）十月に撰述したもので、『行実』の末尾識語に「小子親炙左右久矣、綴緝零碎、得萬分之一」云々とあるから、空谷の生前におけるなまの記録を伝えているものといつてよい。後者の『日錄』は、禪僧大極の日記で、長禄三年（一四五九）元旦より寛正四年（一四六三）までと、寛正六年より応仁二年（一四六八）十二月三十日までの間、毎日記録したものを集めたものである。⁽⁷³⁾また本集は、文安五年（一四四八）後、間もない時期に成立したと推定されるから、だ

いたい『日錄』と同じ頃のものであることがわかる。されば『行実』は、空谷の弟子天章の撰であり、かつ空谷の示寂に最も近い資料であるから、誤記したものとは考えられない。ともかく、この『行実』は第一等史料であるから、空谷の遺偈所載の記録としては最古に属する。従って資料的価値の上より判断すれば、『行実』の文句が当然正しいと思われる。また漢詩偈学の上からしても、この『行実』の語句が妥当のように思う。本集に収録の遺偈は、いずれの資料から採録したか不明であるが、或は誤って記したものではないかと想像される。しかし語句の正誤の判定については、さらに今後の考究に俟つこととする。

なお「木馬」は、木製の馬。つまり生命のないものの意である。「虚空」は、サンスクリット語のアーカシャ（akasa・阿迦奢）の訳。空間。一切諸法の存在する場としての空間、さわりなく（無礙）さえられない（無障）のが特徴である。また「おおぞら」の意にも解する。「蹤跡」は、あしあと、事跡、またはゆくえの意である。

（十五）鳴^{ノリ}仏^{ヲシ}、祖^{シテ}、七十九年^〇、転身一路、无表^{ムヒ}辺。

「大綱西堂」の「大綱」とは、「大綱和尚」のことであ

り、「西堂」は、「せいとう」とも読み、禅院の職名であつて、「西庵」ともい、^{とうどう}東堂（東庵とも称す）に対していう。「瑩山清規」に「如^キ_テ他寺退院長老者、称^ス之西堂」ことある」とく、禅宗で他寺の住持となつた経歷のある僧を「西堂」と称している。つまり西は賓位の意で、「西堂」は最高の賓客という意味である。また住持をたすけて修行者を導くものの中で、最上席を占める老僧の意で、「西堂」会の導師（師家）を「西堂」と称し、わが國では「後堂」の上に位する役名に用いている。ともかく「西堂」は禅院の重職である。⁽⁷⁾

さて当時かかる「西堂」の重職についていた「大綱和尚」というのは、いかなる歴歴の禅僧であろうか。この和尚について調査するに、まず『延宝伝燈錄』卷二十五、『本朝高僧伝』卷三十六によれば、樞翁妙環（無学祖元—高峰顕日の嗣）の法嗣に大綱帰整なる人物がある。次に『正燈世譜』の「崇福寺歴代世次」によれば、博多崇福寺の第五十五代の住持となった大綱全舉（無学祖元—大用慧堪の嗣）という人がある。右の二人の「大綱」は、先の空谷明応と同様に、臨濟宗仏光派の禅僧であることが知られる。前者の大綱帰整は、鎌倉田覚寺に在住し、建長寺（八十一世）

の住持を薦し、さらに伊豆の国清寺（円覺寺派・静岡県田方郡韮山村奈古谷所在）の住持となり、この間、同寺の開基上杉憲顯（安養院桂山居士）の遠忌を迎え、陞座問答をなし、次いで示衆を行なつたが、その時の法語が伝に記されている。のち正落庵で寂したが、生寂年不詳。嗣法の弟子に学海帰才（円覺寺百十世〔または百十一世〕）・建長寺百三十九世・永享十年〔一四三八〕十月十九日寂）がある。また後者の大綱全舉は、貞治六年（南朝、正平二十二年・⁽⁷⁵⁾一三六七）三月十七日に寂し、塔を正印といい、仏眼禪師と勅諡されている。その他の事歴については不詳。

この他、曹洞宗には、大綱明宗（了菴慧明の法嗣）という人がある。この大綱は、相模最乗寺、丹波永沢寺、能登總持寺に歴住し、相模大慈院を開き、上州總寧寺にも住して、永享九年〔一四三七〕正月十四日入滅している。生年および何歳にて遷化したか不明。⁽⁷⁶⁾

以上、「大綱」と号する三人の禅匠を抽出し、その経歴を記したのであるが、これらの禅匠に関する史料を見るに、いずれも遺偈を記録していないことは甚だ遺憾である。されば、上掲の遺偈はこのうちの誰人の遺偈に属しているのであろうか。そこです臨済・曹洞のどちらの系統の禅僧

であるかと云うに、遺偈の並べ方が、最初に曹洞の禅僧のものを一括して掲げ、その次に臨済の円爾・空谷の遺偈を収録し、次いで大綱西堂の偈を示している点からすれば、大綱なる人物は、臨済系統の禅僧であることが首肯される。よって曹洞系統の大綱明宗ではないことが判然する。それでは臨済系統の帰整・全華のどちらの禅僧であろうか。遺偈の承句に「七十九年」とあるから、両者の史料の

いすれかに、「七十九歳」にて入寂したことを記しておれば、その人物に間違いないのであるが、惜しいことにこの点がともに明らかでない。しかし、両者の事歴などの上から推定するに、恐らく前者の帰整ではないかと思う。一応大綱帰整と推断しておく。今後、さらに新資料の発見と考究に俟つことにしたい。

起句の「嗚^レ仏^レ呵^レ祖[」]の「嗚^レ」の字は、「罵^レ」または、「罵^レ」の省字、「ののしる」、「口ぎたなく叱ること」。

「呵^レ」は叱ること。つまり、仏や祖師をあしさまにののしること。禅僧が修行者を指導するときに用いる手段で、仏祖を罵倒するという否定的な方法によって、修行者を仏祖の境地に導こうとするのである。転句の「転身一路」は、迷いの境地から、悟りの境地に転入してひたすら(一路)

仏の境地に徹底し安住することである。結句の「无表无辺」は、言葉でいい表わしようがなく、広大ではてしないこと。つまり絶対の仏の境地、悟りの境地をいう。

叙上、圓爾辨圓、空谷明応、大綱帰整の三首の遺偈は、いざれも臨済の禅匠によるものであることがわかる。

む　す　び

以上、本集に収録されている遺偈十五首について、一々該当の遺偈所載の諸本と対比して、諸方面より考究したのである。いまこれを宗派別に見れば、洞門禅僧の遺偈十二首、濟門禅僧の遺偈三首となる。また、時代別に見れば、鎌倉時代のもの四首、南北朝時代のもの七首、室町時代のもの四首⁷⁸となり、すなわち鎌倉中期(道元禅師寂・一二五三)より室町初期(竹窓智嚴寂・一四二三)の遺偈十五首が収録されており、洞門兩門における中世禅僧の遺偈であることがわかった。次に各禅僧の遺偈の型について見ると、十五首のうち、四言四句の古詩体が十三首の多数を占め、七言の絶句体は僅か二首(孤雲懷舜・大徹宗令の遺偈)存するのみである。各禅僧の遺偈は、総じて四言四句の古

詩体が最も多く、五・七言の絶句体が極めて少いことは、叙上のとおりであるが、本集における十五首の遺偈についてもこのことが首肯される。

ともかく本集は、文安五年に近接した時期、すなわち室町中期十五世紀の中葉に經めたものであるが、當時としては、これだけの数の遺偈を、よくも集録したものと思う。このうち、無漏素崇・月鑑巨淳・松岸旨淵・大綱帰整の四人の遺偈のごときは、初めて本集によって知られるのであり、また明峰素哲の遺偈も、大乘寺に伝わっている「明峰喪記」と本集によってのみ知られるのである。この五師の遺偈は、かようにいざれも珍しいものであり、まことに貴重な資料である。いまさらながらその編者の苦心の程が偲ばれると同時に、本集の遺偈が資料的価値の高いことも首肯されるであろう。

ただ惜むらくは、洞門においては、寒巒義尹（孤雲懷辨）の法嗣、肥後大慈寺開山、正安二年〔一三〇〇〕寂の遺偈「八十四年、動靜得禪、末後一句、威音已前」、覺山紹璉禪師（徹通義介の法嗣、總持寺開山、正中二年〔一三二五〕八月十五日寂）の遺偈「自耕自種閑田地、幾度賣來買去新、無限靈苗繁茂處、法堂上見三插鉢人」、義雲（寂円

新出資料による禅僧の「遺偈」の研究（下）（田島）

の法嗣、越前宝慶寺二世、永平寺五世、正慶二年、南朝元弘三年〔一三三三〕十月十二日寂の遺偈「毀教誘禪、八年十一月、天崩地裂、没三火裏泉」、通幻寂靈（峨山韶碩の法嗣、丹波永沢寺開山、明德二年、南朝元中八年〔一三九一〕五月五日寂）の遺偈「算計甲子、滿七十年」、末期一句、兩脚踏天」などのごとき、或は洛門では、宗峰妙超（南浦紹明の法嗣、京都大徳寺開山、建武四年、南朝延元二年〔一三三七〕十一月二十一日寂）の遺偈「截斷仏祖、吹毛常磨、機輪転處、虛空咬牙」、（京都大徳寺藏・重要文化財・卷頭写真参照）、清拙正澄（中國の人、愚極智慧の法嗣、鎌倉建長寺廿一世、淨智寺十六世・円覚寺十六世・南禪寺十四世、暦応二年、南朝延元四年〔一三三九〕正月十七日寂）の遺偈「毘盧卷空海水立、三十三天星斗濕、地神怒、把鐵牛鞭、石火電光追、莫及、珍重、首座大衆、暦応二年正月十七日正澄（花押）」（神奈川県常盤山文庫蔵・国宝・卷頭写真参照）、夢窓疎石（高峰頤日の法嗣、天龍寺・相國寺開山、觀応二年〔一三五一〕八月三十日寂）の遺偈「転身一路、橫該豎抹、畢竟如何、彭八刺（喇）札」などのごとき、当時の有名な禅僧たちのものが収録されていないのは、甚だ遺憾である。しかし、その当

新出資料による禅僧の「遺偈」の研究(下) (田島)

時としては、本集所載の十五首以上の数を調査し収録することは、困難なことであったと思う。よって今後、中国・日本各史伝書、語錄などより多くの禅僧の遺偈を集録編纂して、これを一書となし、さらにこれに解説を付して刊行されるならば、益するところ多く、まことにその意義は深いと思う。それは、遺偈が、短文のなかに、禅僧の死を踏台としつつ、それを越えて、永遠を明かしたものであり、つまり「死と永遠についての短篇的教え」であるから、現代の人々に対して、これが人間性の発見となり、人間性を回復し、もって人間の原点にかえることが出来るからである。

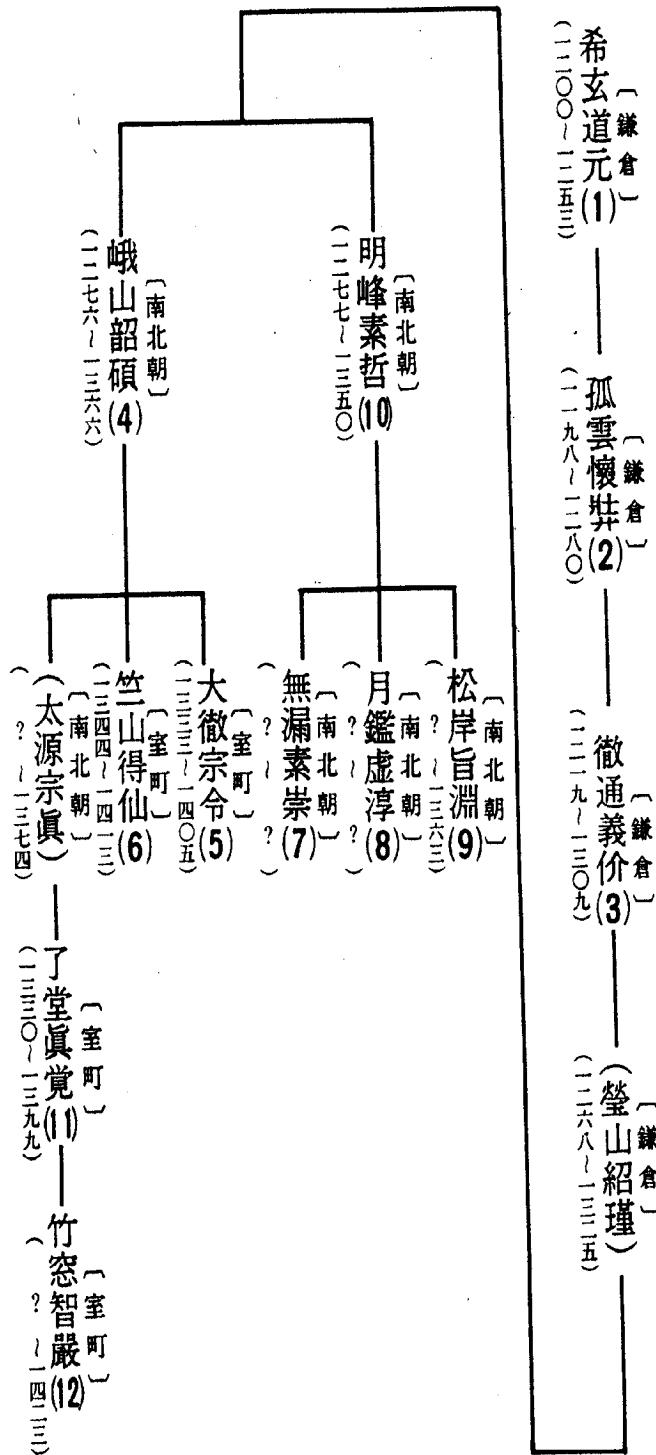
最後に、上述した十五首の遺偈の各禅僧について、その法系図を掲げておく。人名の下の()内の数字は、本集記載の順位を示し、人名に()を付してあるのは、本集に遺偈の収録されていない人を示したものである。また人名の左辺の括弧内の数字は、生誕・入寂の年を西暦紀年で表示し、右辺の「」内には、その人の入寂紀年に基き、その時代名を記しておいた。なお生寂紀年の不明な人については、それぞれ前後の事情などから推定し、該当する時代名を記した。

(一九七三・五・八稿了)

禪僧遺偈略系譜

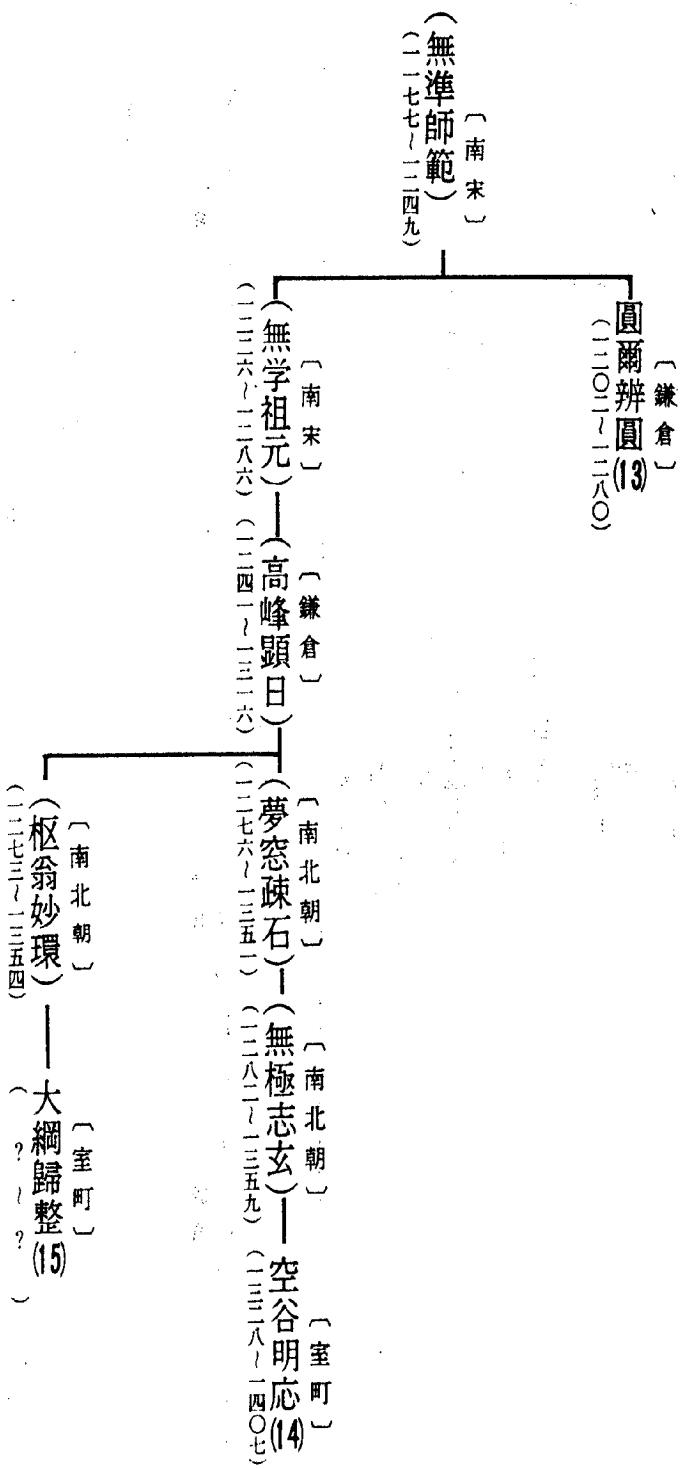
—『禪林雅頌集』所収—

A 曹洞宗



新出資料による禅僧の「遺偈」の研究（下）（田島）

B 隆濟宗



〔注〕

- (38) 『続扶桑禪林僧宝伝』卷三（『大日本佛教全書』1111九一三三〇頁）。
- (39) 『続扶桑禪林僧宝伝』以外の史伝書は、全部「珪」の字を「桂」と書す。恐らく最初は「珪」の字を使用していたが、のち「桂」と改められたものと思う。
- (40) 『口域洞上諸祖伝』卷下および「大本山總持寺住持歴代」（『曹洞宗大系譜』三二二頁）は、「仙」の字を「懸」と書す。
- (41) 『口域洞上諸祖伝』卷下（『大日本佛教全書』六一頁）、『日本洞上聯燈錄』卷三（『曹洞宗全書』二八六頁）、『延寶伝燈錄』卷七（『大日本佛教全書』一一七頁）、『続扶桑禪林僧宝伝』卷三（『大日本佛教全書』三三三〇頁）（『本朝高僧伝』卷三十八（『同全書』五一頁）。
- (43)・(44) 『大乘聯芳志』（『曹洞宗全書』五七七頁）、館残翁氏「加賀大乘寺史」二六一・八〇・一一〇〇頁）。
- (45) 館氏「大乘三代明峰禪師葬亡略記」（『大乘叢書』第一帳）、同氏『加賀大乘寺史』七九・二六二頁）。
- (46) 『曹洞宗大系譜』一九頁、館氏『加賀大乘寺史』八二頁、吉住浩巖氏『明峰素哲禪師御伝記』七三頁）。
- (47) 「永光寺文書」（『曹洞宗古文書』卷上、一六九頁）。
- (48) 『大乘聯芳志』（『曹洞宗全書』五七七頁）、館氏『加賀大乘寺史』二六二頁）。
- (49) 賀大乘寺史』二六一頁）。
- (50) 『日本洞上聯燈錄』卷11（『曹洞宗全書』二五六頁）、『曹洞宗大系譜』一九頁。
- (51) 和尚（おしょう）は、梵語で、ウパー・ディヤーヤ（*upadhyaya*）、鄧波駄耶（うぱだや）と音写、力生と訳する。師の力が法身を生長する義。親教師の意。また僧の尊称。大衆の師たる高徳の僧で、戒和上（かいわじょう）と称することもある。天台宗では「かしょう」法相宗・真言宗・律宗などでは「わじょう」禪宗・淨土宗では「おじょう」と呼ぶ。律宗のみ「和尚」（わじょう）と書く。日本では古く官名として大和尚位があつたが、後世では、弟子が師を尊称して用いる。なお鑑真（がんじん）・良辨（ろうべん）・慈鎮は、必ず「かじょう」と呼び、布袋（ほてう）は、必ず「おじょう」という。
- (52) 『大乘聯芳志』（『曹洞宗全書』五七七頁）、『加賀大乘寺史』二六二頁）。
- (53) 『大乘聯芳志』（『曹洞宗全書』史伝上、五七七一五七八頁）、『重統口域洞上諸祖伝』卷1（『同全書』同、一五四頁）、『日本洞上聯燈錄』卷11（『同全書』同、二五四頁）、『曹洞宗大系譜』一九・二二一・二三一頁、『加賀大乘寺史』一一〇〇・一一〇一・二六二頁）。

新出資料による禅僧の「遺偈」の研究（下）（田島）

- (53) 「永光寺文書」（『曹洞宗古文書』卷上、一七〇頁）、
『加賀大乘寺史』八四頁、吉住浩巖氏『明峰素哲禪師
御伝記』七四頁。
- (54) 『大乘聯芳志』（『曹洞宗全書』五七七頁）、『洞谷
五祖行実』（『同全書』五九七頁）、『日域洞上諸祖
伝』卷上（『同全書』四六三頁）、『日本洞上聯燈錄』
卷二（『同全書』二五〇頁）、『本朝高僧伝』卷二十
九（『大日本佛教全書』四二〇頁）、『延宝伝燈錄』
卷七（『同佛教全書』一一一頁）、『統扶桑禪林僧宝
伝』卷二（『同佛教全書』三三三頁）吉住浩巖氏『明
峰素哲禪師御伝記』。
- (55) 館氏『大乘三代明峰禪師葬亡略記』（『大乘叢書』第
二輯）、同氏『加賀大乘寺史』七九・一〇〇頁。
- (56) 抉著『絵辨岐山韶碩禪師』一一六頁、抉稿『峨山韶碩
禪師の遺著とその真偽』（下）（愛知学院大学論叢『一
般教育研究』第十七卷第一号、二五一二・七頁）。
- (57) 『日本洞上聯燈錄』卷三（『曹洞宗全書』二七二頁）。
- (58) 『日域洞上諸祖伝』卷上（『曹洞宗全書』五三頁）、
『延宝伝燈錄』卷七（『大日本佛教全書』一二六頁）。
- (59) 「大本山總持寺住持歴代」（『曹洞宗大系譜』附録、
三三三頁）。なお同書には、竹窓の「窓」は、「聰」
の字に記されている。
- (60) 『補巖寺納帳』には、表紙に「文龜三^壬歲夷則吉辰」、
「宝陀山補巖禪寺納帳、法山和」（以下破損す）と見
えている。
- (61) 『日本洞上聯燈錄』卷四（『曹洞宗全書』二九七頁）。
(62) 『重続日域洞上諸祖伝』（『同全書』一六一頁）、『延
宝伝燈錄』（『大日本佛教全書』一三四頁）。
- (63) 『元亨釈書』卷七（『新訂国史大系』31-1四頁）、
『延宝伝燈錄』卷二（『大日本佛教全書』五六頁）、
『扶桑禪林僧宝伝』卷二（『同佛教全書』二二〇頁）、
『本朝高僧伝』卷二十（『同佛教全書』二八六頁）、
『扶桑禪林書』（『新訂史籍集覽』宗教部四八三・
一〇〇五頁）。
- (64) 『東福寺古文書』、白石虎月氏『東福寺誌』一四四。
〔付〕一三三頁、同氏『禪宗編年史』二四四一・四八頁、
堀江知彦氏『墨跡』（「日本の美術」一五・一九頁）、
今枝愛真博士『新訂墨跡祖師伝』一四一・三〇四頁、
荻須純道博士『京・鎌倉の禪寺』五・六八頁。
(65) (63) を参照。
- (66) 『沙石集』（『日本古典文学大系』四五九頁）、『扶
桑禪林書』（『新訂史籍集覽』宗教部四八八頁）。
- (67) 『金撰集』卷四（『古典文庫』三・三四一・二六二頁）。

(68) 古田紹欽博士『禪僧の生死』一九頁。

(75) 三七頁等)、『禪林象器錄』(一七二—一七四頁)。
『延寶伝燈錄』卷二十五(『大日本佛教全書』三三七頁)、『本朝高僧伝』卷三十六(『同全書』五〇六—五〇七頁)、「臨濟宗建長寺住持歷代」・「臨濟宗円覺寺住持歷代」(『說史備要』一〇一・一〇一四頁、『佛教大年表』一〇六・一〇七頁)、『禪宗辭典』六・七・九頁)、『田覚寺史』一〇〇・七七六・八五二・八八二頁。

(69) 一六九四頁)、『特賜仏日常光國師空谷和尚行実』(「大正新修大藏經」続諸宗部十二・三九頁)、『本朝僧宝伝』卷下(『大日本佛教全書』四四一四九頁))、

(76) 『扶桑禪林書目』(『新訂史籍集覽』^{増補}宗教部、四八四・四八五頁)、『群書解題』第四下、二〇七—二〇八頁、玉村竹二氏『夢窓國師』三四四頁、同氏『五山文学』二一五・二一六・二八六頁、同氏『田覚寺史』八五三頁、今枝愛真博士『禪宗の歴史』九二・一〇九・一一九・一二〇頁。

(70) 『常光國師行実』(『続群書類從』第九輯下、六九三頁)、「特賜仏日常光國師空谷和尚行実」)、『大正新修大藏經』続諸宗部、十二・三九頁)。

(77) 『重統日域洞上諸祖伝』卷二(『曹洞宗全書』一六二頁)、『日本洞上聯燈錄』卷四(『同全書』一一〇頁)、『延寶伝燈錄』卷八(『大日本佛教全書』一三五一一三六頁)、『本朝高僧伝』卷四〇(『同全書』五五八頁)、『大雄山誌』二九—三〇頁。

(71) 『碧山日錄』卷四(『新訂史籍集覽』宗教部、三六八頁)。

(78) 寂年不詳者の遺偈三首のうち、無漏素崇・月鑑虛淳の二首は、前後を推定して南北朝時代に挿入し、大網帰整の一首は、やはり推定の上、室町時代のなかに加えて数えたものである。

(72) 『延寶伝燈錄』卷二十六(『大日本佛教全書』三四二頁)、『本朝高僧伝』卷三十七(『同全書』五一八頁)。

(79) 『仏書解説大辞典』卷九、三六二—三六三頁)、『角川日本史辞典』七六八頁。

(73) 『瑩山規』(『曹洞宗全書』宗源下、四七四頁)、『常清大師全集』三三四頁)、『勅修百丈清規』(『国訖一切經』和漢撰述⁵²諸宗部九、二一一・二二三・二新出資料による禪僧の「遺偈」の研究(下)(田島)

新出資料による禅僧の「遺偈」の研究（下）（田島）

卷一（二四三頁）、『延宝伝燈錄』卷七（『大日本佛教全書』一一六頁）に収録している。なお『寒巖禪師略伝』（『曹洞宗全書』史伝下、二五九頁）、『扶桑禪林僧宝伝』卷二（『大日本佛教全書』二一七頁）、『本朝高僧伝』卷二〇（『同全書』二九二頁）には、伝を記しているが、いずれも遺偈の記載はない。

『諸嶽開山二祖禪師行錄』（『曹洞宗全書』史伝上、二二頁）、『日本洞上聯燈錄』卷二（『同全書』史伝上、二四六頁）、『洞谷五祖行實』（『同全書』史伝上、五九六頁）、ただし、最後の『五祖行實』は、転句を「無限靈苗種熟脫」とあって、「行錄」・『聯燈錄』の両書の句と三字を異にしている。『日域洞上諸祖伝』（『曹洞宗全書』史伝上、四三頁）・『大乘聯芳志』（『曹洞宗全書』史伝上、五七七頁）の瑩山禪師の伝には、遺偈は見出されない。

義雲の遺偈は、『宝慶由緒記』（『曹洞宗全書』寺誌三八〇頁）・『義雲和尚略伝』（『義雲和尚語錄』卷下、八〇頁）・『義雲和尚語錄』（『義雲和尚語錄』卷下、八〇頁）および『日域洞上諸祖伝』卷上（『同全書』四五五頁）、『日本洞上聯燈錄』卷二（『同全書』二四七頁）。『延宝伝燈錄』卷七（『大日本佛教全書』一一〇頁）は、結句の第三句即ち「裏」を「裡」に作る点を異にしている。『本朝高僧伝』卷八（『同全書』一三〇頁）・「延宝伝燈錄」卷一〇（『大日本佛教全書』二七七頁）、『扶桑禪林僧宝伝』卷四（『同全書』二七七頁）・「寒巖禪林僧宝伝」卷四（『同全書』二七七頁）・「臨濟宗建長寺住持歴代」・「臨濟宗田覓寺住持歴代」・「臨濟宗南

(82)

三四八頁）の義雲の伝には、遺偈は収録されていない。竜泉寺本『通幻禪師語錄』（『曹洞宗全書』語錄一、九七頁）、『豈鐘善鳴錄』卷二（『同全書』拾遺、二八四頁）は、転句の「一句」の二字を「行脚」に作る。また『日本洞上聯燈錄』卷一（『同全書』史伝上、二六〇頁）は、転句の「末後一句」の四字を「転身端的」に作る。『延宝伝燈錄』卷七（『大日本佛教全書』一二三頁）、『本朝高僧伝』卷三十六（『同全書』四九八頁）は、「闇浮往来、滿七十年」、転身端的、兩脚踏天」とあり、『日域洞上諸祖伝』卷上（『曹洞宗全書』史伝上、四七頁）・『扶桑禪林僧宝伝』卷八（『大日本佛教全書』二七五頁）には、「闇浮來往、滿七十年」、転身端的、兩脚稍天とある。『永沢寺通幻禪師行業』（『曹洞宗全書』史伝下、二七二頁）・『通幻禪師行實』（『通幻禪師全集』の『通幻禪師統語錄』六一頁）は、「闇浮來往、滿七十年」、這転身處、雙脚踏天とあって、両書とも「踏」の字は「踏」に作る。なお、『行実』は、転句の「這」の字を「個」に作る。『通幻禪師語錄』（『通幻禪師全集』九四頁）。

(83)

『延宝伝燈錄』卷一〇（『大日本佛教全書』二七七頁）、『扶桑禪林僧宝伝』卷四（『同全書』二七七頁）・「寒巖禪林僧宝伝」卷四（『同全書』二七七頁）・「臨濟宗建長寺住持歴代」・「臨濟宗田覓寺住持歴代」・「臨濟宗南

「禪寺住持歴代」（『読史備要』1010頁・1013
・1015頁）、「金宝山淨智寺歴代」（『続禪宗編
年史』七六三頁）。

(84)

前号、七頁・注(5)一七一・八頁参照。清拙正澄自筆の遺偈（紙本、縦三六・六センチ、横四一センチ）が伝わっている。伝えるところによれば、この遺偈は、清拙の臨終に間に合わなかった弟子某が、棺にすがつて泣いたところ、清拙はたちまち目を開き、その弟子のために戒法を受け、再び目をつぶつたという。その奇跡によって、この墨跡を「棺割の墨跡」と称する。（堀江知彦氏『墨跡』七一・七三頁、田山方南氏『墨蹟の話』一八頁）。

(85) 『延宝伝燈錄』卷十九（『大日本佛教全書』二六五頁）、

『扶桑禪林僧宝伝』卷四（『同全書』二三一頁）に、夢窓師の伝を記載しているが、その遺偈は収録していない。

〔付記〕

資料の撮影について、何かと御配慮賜わった関係各位に対し、甚深の謝意を表する次第である。

新出資料による禪僧の「遺偈」の研究（下）（田島）

執筆者紹介

田島柏堂

禅研究所所長

永久岳水

愛知学院大学教授・文学博士

長谷部幽蹊

愛知学院大学助教授

大西誠一郎

愛知学院大学教授・文学博士

江見佳俊

愛知学院大学助教授

千野直仁

愛知学院大学助手

佐藤眞理子・栗野俊子

愛知学院大学実験助手

寺本春代・津田由紀子

愛知学院大学講師・文学博士

横超慧日

大谷大学教授

玉城康四郎
秋重義治

愛知学院大学講師・文学博士
東京大学名誉教授

神戸信寅

駒沢大学教授・文学博士
愛知学院大学助手